

# 3 カ国民衆会議 2018

危機の 21 世紀を超えて、つながりあい、  
食の幸せを未来に手わたすために

2018 年 11 月 20 日(火)～11 月 22 日(木)

プログラム



## 目次

3カ国民衆会議実行委員会設立趣意書 .....	3
実行委員会参加者・団体 .....	3
経緯説明.....	4
全体スケジュール.....	6
各イベントの概要と登壇者紹介 .....	10
11月21日出展者・参加者紹介 .....	13
三カ国民衆会議呼びかけ人・団体 .....	13

### 三カ国民衆会議開催概要

#### Day 1:

11月20日(火)18:00~20:00 聖心女子大学グローバルプラザ  
「日本の私たちと今世界で「大豆」をめぐる起こっていること:アグリビジネスによる  
油糧作物栽培の環境・社会的影響と住民の抵抗」

#### Day 2:

11月21日(水)15:00~20:40 聖心女子大学グローバルプラザ  
第一部「グローバルな食&農の危機と『食の主権』~『私たちの食とたね』を未来に  
手わたす」  
第二部「食・農・くらしと地域の自立へ~『犠牲の開発モデル』の限界を乗り越える」

#### Day 3:

11月22日(木)17:00~19:00 参議院議員会館  
「緊急報告会:日本とODA/投資:モザンビーク北部で何が起きているのか」

#### 会議案内 URL

<https://www.ngo-jvc.net/jp/notice/2018/10/2018triangular.html>

3カ国民衆会議実行委員会ユースチームによるクラウドファンディング大募集!  
皆様の温かいご支援、よろしくお願ひいたします(2018年11月25日まで)。  
<https://congrant.com/project/triangularfr/551>

### 3 カ国民衆会議実行委員会設立趣意書

21 世紀に生きる私たちは、未来の世代にどのような「食」と「農」を手渡していけるのでしょうか？そのためにどのような「農」を取り戻すことが出来るのでしょうか？

いま、日本だけでなく、世界各地で「食」とそれを支えてきた農家は深刻な危機に直面しています。「食」はなくてはならない命の源です。これまで私たちは、食卓にのぼる「食」の多くを「家族による小さな農業(家族農業)」に頼ってきました。しかし、いま、これまでの「農」の営みが続けられないところまで、世界中の農家は追いつめられています。

その原因に、もうけを最重要視する投資や企業によって構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象があります。国によってその影響は異なりますが、家族農家の手から、農地・水・たね(種子)・森へのアクセス、そして「どこで何をどう育てるのか」の決定権が急速に奪われつつあります。いつの間にか遺伝子組み換え作物が栽培され、みなさんの口に入っている現状もその一例です。農家の苦境は、「食」の受け取り手でもある私たちが、「どこで誰の育てた何をどう食べるか」の選択肢と決定権を失うことにもつながっています。つまり、「食」と「農」の支配を通じて、一人ひとりの生き方や生命までもが左右される時代となっています。

グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南(途上国)」の先住民族や家族農業を営む人びとですが、何重にも及ぶ圧力を受けながらも、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきました。「母なる地球(マザーアース)」、「食の主権」、「たねへの権利」、「アグロエコロジー」、「小農の権利/主権」——これらのビジョンや実践は、国境を超えた人びと同士の間を通じた、世界に広がり、多くの素晴らしい変化を生み出してきました。来年には、「国連家族農業の 10 年」が始まります。

これを受けて、日本の私たちは、アフリカのモザンビーク、南米のブラジルから来日する農民男女、教会関係者、女性運動、環境や人権団体、若手研究者の皆さんとともに、多様性を大事にし、「食と農の未来」を描き、課題を整理し、これらを乗り越えるための方策と計画を話し合うことになりました。

3 カ国の人びとの出会いを通じて、みなさんの「共通の家」であるはずのこの地球、自然、地域社会、農家、一つひとつの命を守り、つながりと主権を土台とした幸せと喜びあふれる「食」と「農」の関係を未来の世代に手渡せるよう、力をあわせたいと思います。

2018 年 8 月 3 日

### 実行委員会参加者・団体

池上甲一(近畿大学名誉教授)／茂住衛(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／船田クラークンさやか(明治学院大学国際平和研究所研究員)／渡辺直子(特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター JVC)／西崎伸子(福島大学行政政策学類教員)／古沢広祐(國學院大学教授)／山中一耕(風の里ヤマナカ農場)／岡田直子(特定非営利活動法人アースマンシップ)／受田宏之(東京大学教員)／西川 潤(早稲田大学 名誉教授 / 連帯経済フォーラム発起人)／斉藤 龍一郎(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／津山 直子(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)／松平 尚也(有機・小規模農家、京都大学農学研究科博士課程 小農研究)／大橋正明(聖心女子大学教授/恵泉女学園大学名誉教授)／印鑰智也(日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)／ロマンアルカラ佳奈(Seed Library Network)／森亮介(3カ国民衆会議プロボノ/ファンドレーシングチーム)／大林稔(モザンビーク開発を考える市民の会)／白鳥清志(アフリカ理解プロジェクト)／浅岡みどり(立教大学大学院博士課程、恵泉女学園大学講師)／鈴木敬太(3カ国民衆会議プロボノ/ファンドレーシングチーム)／マッカーティン・ポール(聖コロバン会)／小林舞(総合地球環境学研究所研究員)(非公開 3 名、計 26 名)

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター(JVC)／特定非営利活動法人 WE21 ジャパン／農民運動全国連合会／TPPに反対する人々の運動／モザンビーク開発を考える市民の会／日本の種子(たね)を守る会／アフリカ日本協議会 (計 7 団体)

## 経緯説明

日本・モザンビーク・ブラジルの市民社会による「3カ国民衆会議 (Triangular Peoples Conference / 三角民衆会議)」のアイデアを最初に提案したのは、モザンビーク最大の小農運動「全国農民連合 (UNAC)」でした。そして、2013年8月に、第1回「3カ国民衆会議」がモザンビークの首都マプトで開催されました。300人近い参加者の大半を占めたのが、モザンビークの小農でした。

なぜ、モザンビークの小農は日本やブラジルの市民社会とともに、会議を開催したかったのでしょうか？

「三角協力」はもともと、これら3カ国の政府の発案によって始められたものでした。

2009年9月に、日本、ブラジル、モザンビークの3カ国政府は、モザンビークの北部(ナカラ回廊地域)で大規模農業開発事業「三角協力によるアフリカ熱帯サバンナ農業開発プログラム(プロサバンナ)」の着手に合意しました。ナカラ回廊地域の農地の9割以上は、地域住民の8割を占める小農が耕しています。そのような地域で、日本政府は、1980年代に南米ブラジルのセラード地域で進めた開発援助事業(日伯セラード農業開発協力:プロデセール)に倣う事業として、「プロサバンナ事業」を進めようとしていました。

しかし、ブラジルのセラード地域は、豊かな森林に恵まれ、生物多様性の宝庫かつ南米大陸の「水がめ」でもあり、先住民族やアフリカ系の人びと、伝統的な牧畜と農を営む人びとが暮らしてきた場所でした。その地域を、日本とブラジルの「プロデセール事業」推進者らは「不毛の大地」と呼び、木々を引き抜き、大豆のモノカルチャー(単一作物栽培)を導入し、「緑の砂漠」に一変させました。さらに、大豆生産にあたっては、大量の農薬が散布され、ブラジルは世界一の農薬使用国になり、自然環境や地域の人びとの健康を蝕むようになりました。

「ブラジルの成功をアフリカに」の掛声のもと、日本政府が推進する「プロサバンナ事業」では、政府や民間資金を活用して、モザンビークの「農業生産性の低い地元小農が余らせた広大な土地」に日本やアジア市場に向けた大豆の大規模生産を導入する計画がたてられました。そして、「ナカラ回廊開発計画」では、この大豆や穀物を日本とブラジルの政府・企業が整備

する鉄道と港を使って、日本を含むアジア市場に輸出する計画が進められていました。事業対象地として、日本の耕地面積(444万ヘクタール)の2.25倍にも上る10万平方キロメートル(千万ヘクタール)、3州19郡という広大な地域が指定されています。

2012年秋、この計画を新聞などで知った地元の小農は反対の声をあげました。その時に彼らが表明したのは、この援助事業が存在と尊厳を否定した「小農」こそが、地域の人びとの食べものを持続的に生み出し、土地や社会的基盤と文化伝統を継承し、「地球環境の守護神」として日々暮らし、地域社会と国と世界に参与してきたこと、そして、将来世代のために、地域・環境・命・暮らし・主権・未来を守る運動に全力をあげるということでした。

それから6年、私たちは、モザンビークとブラジルの小農、そして彼女ら・彼らを支えるモザンビークとブラジルの市民社会組織との交流と連帯を通して、たくさんのことを学びあってきました。しかし、「プロサバンナ」計画の一部は変更されたものの、「回廊開発」は継続し、当初の計画どおりに大豆・穀物の大規模生産を目指す外国企業や投資が流入し、地元農民の追い出しが続いています。

また、「プロサバンナ」では、「地域農民の3割を2020年までに近代農法に転換させ、商業農家を作る」という事業の方向性が打ち出され、「改良種子・外部投入財(化学肥料・農薬)」の導入と契約栽培の押しつけ、事業に反対する小農や住民の弾圧、援助資金を使った市民社会の分断を図る介入、農民運動の弱体化への関与が続いています。さらには、モザンビークで日本政府と米国政府が実施主体となっている援助事業「栄養と食料安全保障のためのG7アライアンス」によって、種子法の改正(遺伝子組み換え種の導入)や企業に有利な土地政策などが急速に進められており、小農らはますます苦境に立たされています。

日本でも、農民組織の弱体化を狙った政治的介入が続く一方、去年4月には民間企業の参入を促進するために主要作物種子法が廃止され、遺伝子組み換えの品種と農薬使用基準の規制緩和の認可ラッシュが続いています。農家や消費者の手の届かないところで、「食」と「農」のあり方が決められ、家族による小さな農

業の基盤が奪われる事態が起っています。

モザンビーク小農の反対運動のため、「プロサバンナ事業」が予定通りに進まなかったことを受けて、2016年2月、セラード地域に残った森林地帯における大規模農業開発(マトピバ計画)が、日本とブラジル政府によって合意されました。今度はブラジルの先住民族や小農を含む幅広い地域の人びとから反対の声があがりました。

「プロデセール事業」開始からすでに30年以上が経過し、セラード地域では、小さな規模の農家が追い出され、地域の食のシステムが破壊され、代わりに遺伝子組み換え大豆やユーカリなどの輸出向け単一作物のモノカルチャー・プランテーションに変えられてしまいました。ここでも、日本の官民が港湾などの整備に取り組んでいます。さらに、森林と土地を守ろうとする人びとが次々に暗殺される事態にまで至っています。

地球温暖化は工業化や電力や自動車利用などによる化石燃料の大量消費だけでなく、大規模な工業型農業や森林のモノカルチャー化、農地転用によっても促進されています。ブラジルやモザンビークで計画・推進されてきた農業開発や回廊開発事業は、地球温暖化による気候変動をさらに推し進めているのです。気候変動による異常気象(干ばつ・大洪水)の影響を直接受けるのは、日本を含む世界各地の家族農業です。結果として、都市に暮らす人びとも食料価格の高騰という形で影響を受けています。また、生命操作が行われた遺伝子組み換え作物は、セット販売される農薬とともに、私たちの身体に直接あるいは食物連鎖を通じて間接的に影響を与えています。つまり、「食と農の支配」を通じて、命もまた支配の危機に直面しているのです。このように、私たちはいま、世界の隅々まで張り巡らされた「蜘蛛の網」につかまり、逃れることが難しい状況におかれています。

しかし、この深刻な状況の中からも、未来に向けたオルタナティブが育まれてきました。モザンビークの小農は、「犠牲を強いる開発は要らない。私たちは幸せの発展を自分の手で作り出していきたいのだ」と述べて、上から押しつけられる開発計画に抗い、「幸せの発展」を模

索しています。また、ブラジルやモザンビークをはじめとする中南米やアフリカ・アジアの諸国では、小農の運動が中心となって、「母なる地球(マザーアース)」、「家族農業」、「食の主権」、「アグロエコロジー」「農民の権利/主権」の概念を、国家政策に採り入れるために尽力してきました。

日本においても、農業生産の後退と地域の疲弊が急速に進んでいますが、家族農業を基礎としつつも、一般的な企業形態とは異なる集落営農や法人化を通じて、耕作放棄地対策や高齢者の農地の作業受託など、地域農業を守る取り組みが進められています。消費者との提携や新規就農者の受け入れ促進も長きにわたって試みられてきました。言葉として声高に主張されることはあまりありませんが、日本においても「食の主権」や「地域主権」への意識の高まりと意欲的な取り組みが存在しています。

これら各地の「家族による小さな農業(家族農業)」の試みは、互いを刺激し合い、世界レベルでの議論にも大きな影響を与えるようになりました。その結果、来年から「国連家族農業の10年」が開始するとともに、現在「小農と農村で働く人びとの権利に関する国連宣言」が策定されつつあります。世界では、多国籍企業や投資家、国際機関や各国政府に奪われた「食」と「農」の主権を、家族農家と人びとの手の中に取り戻す動きが始まっているのです。

11月に東京で開催する「3カ国民衆会議」では、多様性の尊重と互いの尊厳を土台としながら、次のことを目指します。(1)アフリカ、南米、アジアの3つの地域・国の農民と人びと(民衆)が出会い、(2)互いの課題や試みを紹介しあいながら、(3)3カ国の関係を政府主導の「上から」ではなく、民衆同士による横の関係に転換し直すこと。そして、(4)未来に向かって、ともに、またそれぞれが、何をどう取り組んでいくのかについて話し合います。その上で、(5)話しあった結果を社会と世界に広く発信します。そして、(6)みなで決めた取り組みを一つでも実現していくことで、(7)みな「共通の家」であるはずのこの地球と一人ひとりの命を守り、未来の世代につながりと主権を土台とした幸せと喜びあふれる「食」と「農」の関係を手渡せるよう力をあわせたいと思います。

## 全体スケジュール

### DAY 1

日本の私たちと今世界で「大豆」をめぐる起こっていること  
～アグリビジネスによる油糧・飼料作物栽培の環境・社会的影響と住民の抵抗～

日時:2018年11月20日(火)18:00～20:00

会場:聖心女子大学4号館 聖心グローバルプラザ4-2教室

17:30 開場

18:00 開催趣旨「GRAINの取り組みと本イベントの趣旨」  
渡辺 直子(日本国際ボランティアセンター)

18:05 報告1「日本の私たちと世界の大豆」  
平賀 緑(立命館大学非常勤講師)

18:20 報告2「グローバルな油糧作物栽培の過去と現在」  
ジアナ・アギアール(リオ連邦大学大学院/FASE)

18:55 報告3「ブラジル・セラードにおける環境・社会的影響と住民の抵抗」  
イブレッチ・ウィシニエスキー(セラードを守る全国キャンペーン)

19:30 ディスカッション「日本ができること/してはいけないこと？」  
モデレーター:印鑰 智哉(日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)

19:55 閉会挨拶  
渡辺 直子(日本国際ボランティアセンター)

【主催】国際NGO・GRAIN

【共催】特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター  
3カ国民衆会議実行委員会  
聖心女子大学グローバル共生研究所  
グローバル・フードシステムを考える市民グループ

【協力】モザンビーク開発を考える市民の会

【助成】地球環境基金(西・中央アフリカにおける油ヤシ・プランテーション産業拡大に対応するためのコミュニティ能力強化と地域プラットフォームの形成)、公益財団法人 庭野財団

## DAY 2

日本・モザンビーク・ブラジル 3カ国民衆会議 国際シンポジウム  
～危機の21世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手わたすために～

日時:2018年11月21日(水)15:00～17:30(第一部)、18:00～20:40(第二部)

会場:聖心女子大学4号館 聖心グローバルプラザ3階 ブリット記念ホール

第一部:「グローバルな食&農の危機と『食をめぐる主権』-『私達の食とたね』を未来に手わたす」

総合司会:西崎 伸子(福島大学)

12:30 開場

15:00 オープニング

開催の挨拶 渡辺直子(日本国際ボランティアセンター)

報告「グローバル・フードシステムと3カ国」 印鑰智哉(日本のたね(種子)を守る会)

15:20 現状と取り組み

「いま食とたねをめぐる世界で起きていること:『私たちの食とたね』を守るための取り組み」

ーブラジルで起きたこと&取り組み ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動 MPA)

ーモザンビークで起きつつあること&取り組み プロサバンナにノー!キャンペーン(女性フォーラム/世界女性マーチ)

ー日本で起きつつあること&取り組み 玉山ともよ(のり・たま農園)、金子友子(霜里農場)

16:35 パネルディスカッション

「『私たちの食とたね』を守るために何ができるか？」

ファシリテーター:

印鑰 智哉 (日本の種子(たね)を守る会)

パネル:

斎藤 博嗣 (一反百姓「じねん道」/小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン (SFFNJ))

枝元 なほみ (料理研究家)

松平 尚也 (AM ネット/耕し歌ふあーむ)

イブレッチ・ウィシニエスキー (セラードを守る全国キャンペーン)

モザンビーク小農運動

17:25 クロージング

まとめ 小池絢子(WE21 ジャパン)

17:30 休憩

たねの交換会

## 第二部:「食・農・暮らしと地域の自立へー「犠牲の経済開発モデル」の限界を乗り越える」

### 18:00 オープニング

開催挨拶・趣旨説明 大橋 正明(聖心女子大学グローバル共生研究所)  
「ミスチカ」(歌と表現) モザンビーク農民女性  
一次産品化する「食」の大量生産と輸出モデルの課題 ジアナ・アギアール(FASE:ブラジル)

### 18:25 報告 「犠牲の開発」

世界の南の国々で何が起きているのか？私たちとの関係とは？  
いまモザンビークで起きていること プロサバンナにノー！キャンペーン(Livaningo)  
日本市民社会の取り組み 渡辺 直子(日本国際ボランティアセンター)

### 19:10 報告 オルタナティブ・食・農・暮らしの自立へ

食と農の分野で進む世界的な変化 ブラジル・モザンビーク・日本の農民  
ブラジルでの取り組み イズレッチ・ウシニエスキー(セラードを守る全国キャンペーン)  
モザンビークでの取り組み モザンビーク小農運動  
日本での取り組み 山本 奈美(耕し歌ふあーむ/京都大学大学院)

### 20:00 パネルディスカッション

「みなへの食の幸せのために何ができるのか？」

ファシリテーター:

池上甲一(近畿大学名誉教授)、船田クラーセンさやか(明治学院大学国際平和研究所)

パネル:

ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動 MPA)

イズレッチ・ウシニエスキー(セラードを守る全国キャンペーン/CPT)

天明 伸浩(星の谷ファーム/日本国際ボランティアセンター)

モザンビーク小農運動

### 20:35 クロージング

まとめと閉会の挨拶 西崎 伸子(福島大学)

【主催】 3カ国民衆会議実行委員会

【共催】 聖心女子大学グローバル共生研究所、  
グローバル・フードシステムを考える市民グループ、  
モザンビーク開発を考える市民の会

【協賛】 パルシステム東京、聖コロンバン会

【助成】 ソーシャル・ジャスティス基金、認定 NPO 法人 高木基金、公益財団法人 庭野財団、  
MISEREOR

【賛同人・団体については <http://triangular2018.blog.fc2.com/>をご確認ください】



## DAY 3

### 【緊急報告会】日本と ODA／投資：モザンビーク北部で何が起きているのか ～プロサバンナ事業とナカラ回廊開発に抗う農民たち～

日時：2018年11月22日(木)17:00～19:00

会場：参議院議員会館 会議室 B107

16:30－16:45 参議院議員会館ロビー集合

17:00 開催挨拶・趣旨説明

大林稔 龍谷大学名誉教授 / モザンビーク開発を考える市民の会

17:05 報告1

「日本の ODA/投資とナカラ回廊開発/プロサバンナ事業の 10 年」

渡辺直子 日本国際ボランティアセンター

17:25 報告 2

「モザンビーク農民の声」

モザンビーク小農運動

「農民を支えるモザンビーク市民社会の声」

プロサバンナにノー！キャンペーン

18:25 報告 3

「モザンビーク農民を支えるブラジル市民社会の声」

ジルベルト・シュナイダー ブラジル小農連合 / ビア・カンペシーナ

18:30 質疑応答

18:55 まとめ・閉会の挨拶

船田クラークセンさやか 明治学院大学国際平和研究所

【主催】 3カ国民衆会議実行委員会

【共催】 プロサバンナにノー！キャンペーン(モザンビーク)

【協力】 特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター

特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会

モザンビーク開発を考える市民の会

No! to landgrab Japan

【助成】 ソーシャル・ジャスティス基金、認定 NPO 法人 高木基金、公益財団法人 庭野財団、  
MISEREOR

## 各イベントの概要と登壇者紹介

### DAY 1: 日本の私たちと今世界で「大豆」をめぐる起こっていること ～アグリビジネスによる油糧・飼料作物栽培の環境・社会的影響と住民の抵抗～

世界で生産されている「大豆」の大半は、油と飼料として使用されています。その多くが遺伝子組み換えのもので、工業的な大量生産のため、広大な農地でモノカルチャー（単一作物）栽培が行われています。大豆は「油糧作物」とも呼ばれ、その栽培にあたっては、世界中で多くの企業が森林伐採や土地収奪などを行っており、環境面でも社会面でも深刻な影響をもたらしています。日本との関係の深い「大豆」をめぐる世界で何が起きているのか、その主要な生産地であるブラジル・セラードの地域社会で何が起きているのかをコミュニティの側から具体的に紹介します。



#### 渡辺 直子（日本国際ボランティアセンター）

現在、南アフリカ事業担当/地域開発グループマネージャー。2012年より日本がブラジルとモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。2016年度より、GRAINの事業（西・中央アフリカにおける油ヤシ・プランテーション産業拡大に対応するためのコミュニティ能力強化等）の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでのランドグラブ問題にも関わる。



#### 平賀 緑（立命館大学非常勤講師）

かつて丹波の小さな畑にて有機菜園と鴨たちを育て、手づくりバイオディーゼル燃料で車を走らせ、持続可能な食とエネルギーを促す適正技術を紹介。その後、ロンドン市立大学（食料栄養政策学修士）取得。京都大学大学院で農業・食料の国際政治経済学を学ぶ（経済学博士）。現在、立命館大学の非常勤講師のほか、京都大学経済学研究科経済資料センター研究員。



#### ジアナ・アギアール（リオ連邦大学大学院/FASE）

2014年からリオ連邦大学の都市・地域計画研究科博士課程に在籍（国際関係学修士）。アグリビジネスのための貿易回廊開発の研究を行う。ブラジル NGO の連合組織である FASE（社会・教育支援団体連盟）の国際部門アドバイザーでもある。2012年から2015年まで、トランスナショナル研究所（TNI、アムステルダム）の研究員。2008年から2010年まで国際ジェンダー貿易ネットワーク（IGTN）のグローバル・コーディネーターを務める。本年 EU 議会にて、油糧作物栽培プランテーションの問題に関する講演を行った。FASE: <https://fase.org.br/en/>



#### イングレッチ・ウイニエスキー（セラードを守る全国キャンペーン/ CPT）

エコノミスト（ゴイアス・カトリック大学:PUC/GO）。2005年、ゴイアス州のカトリック土地司牧委員会（CPT）のリージョナル・コーディネーターに就任。2009年にCPTの全国コーディネーターに選出。2015年から2018年にかけて、セラード地域に関する活動の重点化に貢献した。現在、「セラードを守る全国キャンペーン」のコーディネーターを兼任する。2018年4月、CPTの全国執行コーディネーターに選出。本年、ニューヨーク市立大学にて、セラード地域の住民が直面する土地収奪と環境破壊問題の講義を行った。



#### 印鑰 智哉（日本の種子（たね）を守る会事務局アドバイザー）

アジア太平洋資料センター（PARC）、ブラジル社会経済分析研究所（IBASE）、オルター・トレード・ジャパン政策室室長を経て、現在はフリーの立場で世界の食と農の問題を追う。ドキュメンタリー映画『遺伝子組み換えルーレット』、『種子ーみんなのもの？』日本語版企画・監訳。

### DAY 2: 日本・モザンビーク・ブラジル 3カ国民衆会議 国際シンポジウム ～危機の21世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手わたすために～

いま、世界各地で「食」とそれを支えてきた「家族による小さな農業（家族農業）」は深刻な危機に直面しています。その背景に、もうけを重視する投資や企業により構築されるグローバル・フードシステム、それを推進する各国政府や国際機関の政策、地球温暖化などによる異常気象があります。その一方で、グローバリゼーションの負の影響をもっとも深刻な形で受けた「南（途上国）」の先住民族や小さな農業を営む人びとは、それを乗り越えるための創意工夫を積み重ねてきました。「食の主権」「たねへの権利」「アグロエコロジー」これらのビジョンや実践は、国境を超えた連帯を通じて世界に広がり、多くの素晴らしい変化を生み出してきました。

モザンビークとブラジルから来日する皆さんとともに、「食と農の未来」を描き、課題を整理し、これらを乗り越えるための方策を話し合いたいと思います。



西崎伸子(福島大学):福島大学行政政策学類准教授。エチオピアにて野生動物保護をめぐる紛争、地域に根差した保全活動、狩猟活動と野生動物保護の共存に関する研究を行う。また「観光」という視点から、人びとの暮らしだけではなく、地域がおかれた状況を国際社会に発信している。福島の子ども保養プロジェクトにも参画。



渡辺直子(国際ボランティアセンター):2005年JVC(日本国際ボランティアセンター)に、2015年モザンビーク開発を考える市民の会に参加。2013年から日本がモザンビークで行うODA事業「プロサバンナ」に関連してモザンビーク小農組織との合同調査を開始、現在までに10回以上の現地調査を行う。アフリカ、モザンビーク、ブラジルの市民社会組織とともに、アドボカシー活動を展開。



印鑰智哉(日本のたね(種子)を守る会)アジア太平洋資料センター(PARC)、ブラジル社会経済分析研究所(IBASE)、オルター・トレード・ジャパン政策室室長を経て、現在はフリーの立場で世界の食と農の問題を追う。ドキュメンタリー映画『遺伝子組み換えルーレット』、ドキュメンタリー映画『種子ーみんなのもの?』いずれも日本語版企画・監訳。



ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動MPA/ピアカンペシーナ):2004年からブラジル小農運動(MPA)に参加。現在ディレクター。ピア・カンペシーナの一人として、クレオール種(伝統的な固定種)やアグロエコロジーに関する提言を行う。サンタカタリーナ州の植物燃料協同組合で、組合管理や種に関するテクニカルアドバイザーを務めた。2015年にはFAOのアグロエコロジー国際フォーラムに参画。



玉山ともよ(のり・たま農園):兵庫県篠山市在住。夫の坂口典和と共に「のり・たま農園」を経営。約8反の田畑で無農薬・無化学肥料で年50種の野菜を栽培。8品目の野菜セット(週2回)月160~200箱を個人や飲食店に出荷。総合研究大学院大学博士課程在学時、米国先住民族コミュニティのウラン鉱山開発の問題を研究。篠山市原子力災害対策検討委員会委員。3児の母(高2、中2、小4)。



金子友子(埼玉県小川町 霜里農場)化学肥料・農薬等に依存せず、身近な資源(自然エネルギー)を生かし、食物だけでなくエネルギーも自給して自立する農法を目指し、「小利大安(小さい利益でも大きな安心)」をモットーに1971年より埼玉県小川町で有機農業を続けている。



斎藤博嗣(一反百姓「じねん道」/小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン(SFFNJ)):2005年に東京から茨城へ夫婦で移住し新規就農。2017年SFFNJ設立に参画し国連『家族農業の10年(2019~2028年)』を支持するとともに日本および世界で小規模・家族農業の役割と可能性を再評価し農業・食料政策の中心に位置づけることを求める活動を進めている。



枝元なほみ(料理研究家):料理家・家庭料理を考える仕事。<食べる>と<生きる>はくっついている。農業や種子を守ることも取り組んで、子供たちが飢えない未来のために働きたい。キッチン窓を開けて社会とつながりたい、と思っている。



松平尚也(AM ネット/耕し歌ふあーむ):1995年にAMネット立ち上げに関わり、現在代表理事。WTO等の会議に参加しグローバルな農の問題に関わりつつ2010年に就農。耕し歌ふあーむを設立。伝統野菜等の宅配事業の傍ら京都大学農学研究科で小規模農業について農家の視点から研究している。



イゾレッチ・ウシニエスキー(セラードを守る全国キャンペーン/CPT):2005年、ゴイアス州のカトリック土地司牧委員会(CPT)の地域コーディネーターに就任し、2009年にCPTの全国コーディネーターに選出。2015年から2018年にかけて、セラード地域に関する活動の重点化に貢献。現在、「セラードを守る全国キャンペーン」のコーディネーターを兼任。



小池絢子(特定非営利活動法人WE21ジャパン民際協力室):2013年よりWE21ジャパンに参加。民際協力事業を主に一部共有事業(啓発活動)、政策提言事業を担当。2013年より「プロサバンナ」に関わる問題へのアドボカシー活動に参加。当問題に対する地域市民への関心を高めることを目指している。



大橋正明(聖心女子大学教授/恵泉女学院大学名誉教授):現、聖心女子大学グローバル共生研究所長として国際開発学、NGO論、南アジア地域研究などの教鞭をとる。シャプラニール=市民による海外協力会のバン格拉デシュ駐在員と事務局長や赤十字バン格拉デシュ駐在員として、サイクロン防災・救援、難民支援などに従事した経験をもつ。国際協力NGOセンター(JANIC)、ふるさと回帰支援センター理事。



ジアナ・アギアール(ブラジル、FASE):2014年からリオ連邦大学の都市・地域計画研究科博士課程に在籍。アグリビジネスのための貿易回廊開発の研究を行う。ブラジルNGOの連合組織FASE(社会・教育支援団体連盟)の国際部門アドバイザー。トランスナショナル研究所(TNI、アムステルダム)の研究員、国際ジェンダー貿易ネットワーク(IGTN)のコーディネーター等を務める。



山本奈美(耕し歌ふあーむ/京都大学大学院):京都で農場を家族で運営。「里山のめぐみを畑から食卓へ」をコンセプトに、お米やお野菜を「里山のおすそわけ定期便」という名前で販売。友人らと小さなケータリングビジネス(「にじいろごはん」)を運営。京都大学博士課程にて、国内外の「オルタナティブ・フード・ネットワーク」を研究。「考えて発信して作って食べる小さな農家」を目指す。



池上甲一(近畿大学名誉教授):京都大学近畿大学で教育・研究に従事。農業社会経済学の構築を目指し、農業・食料、水・環境、フェアトレード、大規模農業投資などについて研究しながら、日本、アフリカ、タイの村を歩き回っている。著書に『食の共同体』(編著、ナカニシヤ出版、2008年)、『食と農のいま』(編著、ナカニシヤ出版、2011年)、『農の福祉力』(単著、農山漁村文化協会、2013年)など。国際農村社会学会会長。



船田クラセンさやか(明治学院大学国際平和研究所):明治学院大学国際平和研究所研究員。国際関係学博士。元東京外国語大学大学院教員。現在、自給農を目指しながら、ヨーロッパ・アフリカ・南米の小農や研究者・市民社会をつなぐ活動に従事。主・共著書に『モザンビーク解放闘争史』(御茶の水書房)、『解放と暴力一植民地支配とアフリカの現在』(東京大学出版会)。編著に『アフリカ学入門』



2014年の第2回3カ国民衆会議の様子

プロサバンナにノーキャンペン加盟団体(モザンビーク小農運動を含む)

\*参加団体一覧は次頁をご覧ください。



天明伸浩(星の谷ファーム):1995年新潟県上越市吉川区に夫婦で1ターン就農。「星の谷ファーム」を立ち上げる。妻と娘3人の家族農場経営。水稻(7ha)・ブルーベリー(30a)・採卵養鶏(100羽)・農産加工(瓶詰め)。農民という立場から社会活動に関わり、世界の問題にも目を向けている。アジア農民交流センター世話人、日本国際ボランティアセンター(JVC)理事、上越市農地最適化推進委員。

### DAY 3

## 【緊急報告会】日本とODA/投資:モザンビーク北部で何が起きているのか ～プロサバンナ事業とナカラ回廊開発に抗う農民たち～

アフリカ・モザンビーク北部(ナカラ回廊地域)での日本の援助事業「プロサバンナ」に地元農民が反対を表明してから6年が経過しました。この度来日するモザンビーク・ブラジルの20名の代表団は、事業下で悪化する現地状況を受けて、日本の官民が巨額の資金・税金を投じて開発を進める同地域で何が起きているのかを「ぜひ幅広い層の日本人のたちに知ってほしい」ということで、この度【緊急報告会】を開催することにいたしました。

かつて「人びとのため」だった援助は現在、官民連携を推進する日本政府により堂々と「投資・貿易のための援助」と謳われています。本当にこれでいいのでしょうか。日本の貴重な税金の使われ方はどうあるべきなのか。モザンビークの農民や市民社会の皆さんの声に耳を傾けながら、参加者とともに一緒に考えたいと思います。



大林稔(龍谷大学名誉教授/モザンビーク開発を考える市民の会):早稲田大学大学院経済学研究科で博士課程終了。民間企業、在ザイル大使館(経済担当専門調査員)、貿易研修センター(専任講師)、UNDPブルンジ事務所(シニアエコノミスト)、在フランス大使館(アフリカ担当専門調査員)、などを経て現職。アフリカの内発的発展と援助などのフィールドに携わる。



渡辺直子(日本国際ボランティアセンター):南アフリカ事業担当/地域開発グループマネージャー。2012年より日本がブラジルとモザンビークで進めるODA農業開発事業「プロサバンナ」や土地収奪問題の現地調査に従事。2016年度より、GRAINの事業の日本との橋渡し役として、西・中央アフリカでのランドグラブ問題にも関わる。



ジルベルト・シュナイダー(ブラジル小農運動MPA/ビアカンペシーナ):2004年からブラジル小農運動(MPA)に参加。現ディレクター。ビア・カンペシーナの一員として、クレオール種(伝統的な固定種)やアグロエコロジーに関する提言を行う。サンタカタリーナ州の植物燃料協同組合で、組合管理や種に関するテクニカルアドバイザーを務めた。2015年にはFAOのアグロエコロジー国際フォーラムに参画。



船田クラセンさやか(明治学院大学国際平和研究所):国際関係学博士。元東京外国語大学大学院教員。現在、自給農を目指しながら、ヨーロッパ・アフリカ・南米の小農や研究者・市民社会をつなぐ活動に従事。主・共著書に『モザンビーク解放闘争史』(御茶の水書房)、『解放と暴力一植民地支配とアフリカの現在』(東京大学出版会)。編著に『アフリカ学入門』。



モザンビークからの来日・参加団体:モザンビーク弁護士会(OAM)、女性フォーラム(Fórum Mulher)、世界女性マーチ(Marcha das Mulheres/Mozambique)、環境団体(JA!)、農村開発を考えるアカデミック・アクション(ADECRU)、環境団体Livangingo、モザンビーク農民連合加盟農民、カトリック教会・ナンプーラ大司教区正義と平和委員会(計14名)

\*モザンビークの登壇者は、帰国後の人権侵害を避けるため、個人名の表示をしておりません。

## 11月21日出展者・参加者紹介

### 【マルシェ&ファーマーズマーケット出展者】

#### マルシェ(3階ブリット記念ホール後方)

築地書館、明石書店、東京大学出版、農山漁村文化協会、メノビレッジ長沼、  
カフェモザンビコ・プロジェクト、たねと食とひと@フォーラム

#### ファーマーズマーケット(グローバルプラザ1階外)

一反百姓じねん道、特定非営利活動法人 APLA、農民連ふるさとネットワーク  
無農薬・自然栽培マイラブファーム ※雨天の場合、屋内に移動する可能性があります。

### 【展示】3階ブリット記念ホール壁側

写真展 「モザンビーク農民の“No”」の歴史的ルーツを辿る～小川忠博写真展」

展示 Earth in Mind「日本における現代の食問題」

### 【たねの交換会】(3階ブリット記念ホール後方)

日本各地で農家の方々の手によって大切に採られた種子が集まる「たねの交換会」。  
ここに集まる種たちは過去から多くの人々の手を介して引き継がれた生命の根源です。  
私たちには、その共有の財産を次世代に引き継ぐ役割があるのではないのでしょうか。  
「たね」を見て、触れて、知ることから、本来あるべき「たね」とそこに通じる「生産者」の姿に出会って  
いただきたいです。

霜里農場 金子友子／一反百姓「じねん道」 斎藤博嗣／べにや長谷川商店

風の里ヤマナカ農場 山中一耕／のり・たま農園 玉山ともよ

### 三カ国民衆会議呼びかけ人・団体

秋元浩治(大地を守る会)、秋本陽子(ATTAC Japan 国際ネットワーク委員会)、浅岡みどり(立教大学大学院博士課程、恵泉女学園大学講師)、池上甲一(近畿大学名誉教授)、石田洋子(広島大学教授)、井上良(三カ国民衆会議プロボノ/ファンドレージングチーム)、印鑰智哉(日本の種子(たね)を守る会事務局アドバイザー)、受田宏之(東京大学教員)、内田聖子(アジア太平洋資料センター事務局長)、枝元なほみ(料理研究家)、大石高典(東京外国語大学教員)、大橋正明(聖心女子大学教授/恵泉女学園大学名誉教授)、大林稔(モザンビーク開発を考える市民の会/龍谷大学名誉教授)、岡田直子(特定非営利活動法人アースマンシップ)、尾崎零(日本有機農業研究会幹事、農を変えたい! 全国運動関西地域ネットワーク代表、産消循環自給農場くべじたぶる・は一つ> 代表)、菅野芳秀(置賜百姓交流会)、菊地功(東京大司教)、小林舞(総合地球環境学研究所研究員)、近藤康男(アジア農民交流センター 会員/TPP に反対する人々の運動 世話人)、斉藤龍一郎(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、坂井真紀子(東京外国語大学教員)、鈴木敬太(三カ国民衆会議プロボノ/ファンドレージングチーム)、高橋清貴(日本国際ボランティアセンター/恵泉女学園大学教員)、津山直子(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、西川潤(早稲田大学 名誉教授/ 連帯経済フォーラム発起人)、西崎伸子(福島大学行政政策学類教員)、橋本慎司(兵庫県有機農業研究会代表)、弘田しづえ(カトリック・シスター)、船田クラークセンさやか(明治学院大学国際平和研究所研究員×自給農を目指し修行中)、古沢広祐(國學院大學教授)、マッカーティン・ポール(聖コロンバン会)、松平尚也(有機・小規模農家、京都大学農学研究科博士課程 小農研究)、茂住衛(特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会 AJF)、山中一耕(風の里ヤマナカ農場)、山本奈美(有機農家)、吉森弘子、ロマンアルカワ佳奈(Seed Library Network)、エップ・レイモンド(メノビレッジ長沼)、渡辺直子(特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンターJVC) (非公開2名、計41名)

アジア開発銀行福岡 NGO フォーラム(FNA)、アジア太平洋資料センター(PARC)、アジア農民交流センター、(特定非営利活動法人)アフリカ日本協議会、ウータン・森と生活を考える会、聖コロンバン会、(公益社団法人)全国愛農会、全国農民組織連絡会、全日本農民組合連合会、(特定非営利活動法人)日本国際ボランティアセンター、日本の種子(たね)を守る会、農民運動全国連合会(ピア・カンペシーナ加盟)、モザンビーク開発を考える市民の会、(一般社団法人)ル・モンド・ディプロマティーク日本語版の会、(特定非営利活動法人) APLA、ATTAC Japan、FoE Japan、No! to Landgrab, Japan、TPP に反対する人々の運動、(特定非営利活動法人) WE21 ジャパン(計20団体)

# グローバル時代の食と農

シリーズ監修  
ICAS日本語シリーズ監修チーム

A5判／並製

新自由主義的なグローバリゼーションが深化するなかで、私たちの食生活を支える環境も大きな変容を迫られている。世界の食と農をめぐる取り組みにおいて、いま何が行われ、そしてどこへ向かおうとしているのか。国際的な研究者ネットワークICASが新たな視野で展開する入門書シリーズの日本語版。

## ① 持続可能な暮らしと農村開発 アプローチの展開と新たな挑戦

イアン・スクーンズ 著 西川芳昭 監訳 西川小百合 訳 ©2400円  
環境破壊を引き起こさない持続可能な開発を目指すには、どのようなアプローチが必要なのか。歴史的な展開から視野に入れるべき分野まで、開発の基本となる枠組みを概説する基本図書。

## ② 国境を越える農民運動 世界を変える草の根のダイナミクス

マーク・エデルマン、サトルニノ・ボラス・Jr. 著  
鮎田クラークンさやか 監訳 岡田ロマンアルカラ佳奈 訳 ©2400円  
種子への権利や食の主権等、国際法を前巻させる「小農権利国連宣言」を起草したのは、南の小農が牽引するピア・カンパシーナだった。20世紀初頭以降、国境を越えて展開した農民と支持者たちの運動の盛衰を活写。

## ③ フードレジームと農業問題 歴史と構造を捉える視点

フィリップ・マクマイケル 著 久野秀二 監訳 平賀緑 訳

## ④ アグロエコロジー入門 その理論、実践と政治

ミゲル・アルティエリ、ピーター・ロセット 著 受田宏之、受田千穂 訳

## ⑤ 農をめぐる変容、移動と発展

ラウル・デルガード・ワイズ、ヘンリー・ヴェルトマイヤー 著 三澤健宏 訳

## ⑥ 小農経済から農と食を展望する 労働と生命の再生産

ヤンダウェ・ファン・デル・ブルフ 著 池上甲一 ほか 訳

## ⑦ 投機化する収穫 金融資本による農と食の支配にどう立ち向かうか

ジェニファー・クラブ、S.ライアン・イサクソン 著 久野秀二 監訳 平賀緑 訳

## ⑧ 農業を変える階級ダイナミクス 本主義的変化と対抗運動

ヘンリー・バーンスタイン 著 池上甲一 訳

## ⑨ フードレジームのエコロジカルな側面

ハリエット・フリードマン 著 鮎田クラークンさやか、小林舞 訳

**明石書店**

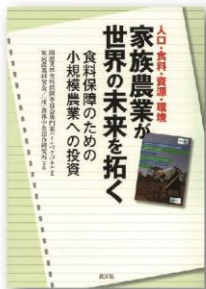
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5

<http://www.akashi.co.jp/>

TEL 03-5818-1171

FAX 03-5818-1174

\*圖書目録送呈 \*価格税別



人口・食料・資源・環境  
**家族農業が世界の未来を拓く**  
食料保障のための小規模農業への投資  
国連世界食料保障委員会専門家ハイレベル・パネル 著  
家族農業研究会・農林中金総合研究所 共訳  
●A5判 192ページ ●2000円+税  
家族農業が食料（安全）保障や食料主権、真の経済成長と雇用創出、貧困削減、生物多様性の持続的管理、文化的遺産の保護等々に貢献できることを、FAO という国際機関が世界各国各地の実情を調べ、実証、勧告。  
ISBN：978-4-540-14116-4



農文協ブックレット18  
**種子法廃止でどうなる?**  
種子と品種の歴史と未来  
農文協 編  
●A5判 96ページ ●900円+税  
稲、麦、大豆などの種子生産を都道府県が責任を持つ法律が3月末に廃止された。稲の品種育成や種子生産の実態はどうなっていて、種子法廃止でどうなるのか。日本の食料の根本となる種子を公共財という観点から改めて見直す。  
ISBN：978-4-540-17169-7

\*直営書店「農文協・農業書センター」  
36000冊の農と食の本を品揃え。  
<http://shop.ruralnet.or.jp/>

**農文協**

農山漁村文化協会  
TEL03-3585-1142  
FAX03-3585-3668



図書出版 **昭和堂**

2018年10月号 定価(本体600円+税)  
**未来の農村をデザインする**  
2018年11月号 定価(本体600円+税)  
**農業における知財と権利**  
産地振興から遺伝資源まで  
2018年11月臨時増刊号 定価(本体1700円+税)  
**どう変わる野菜産業**

**農業と経済**



〒607-8494 京都市山科区日ノ岡場谷町3-1 <http://www.showado-kyoto.jp/>  
TEL075-502-7503 (営業) FAX075-502-7501

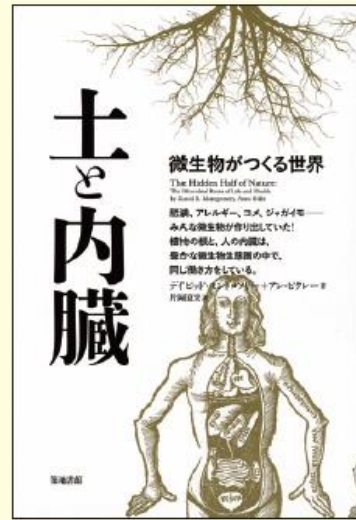
# 築地書館の環境と食べものを考える本



世界の潮流に逆行する日本の農政や食品安全政策に対し、タネと内臓の深いつながりへの気づきから警鐘を鳴らす。

最新刊

**タネと内臓**  
—有機野菜と腸内細菌が日本を変える  
吉田太郎 [著]  
1,600 円 + 税 ISBN978-4-8067-1574-0



肥満、アレルギー、コメ、ジャガイモ—みんな微生物が作り出していった！  
たべもの、医療、私達自身の体への見方が変わる本。

ロングセラー

**土と内臓**  
—微生物がつくる世界  
デイビッド・モントゴメリー他 [著] 片岡夏実 [訳]  
2,700 円 + 税 ISBN978-4-8067-1524-5



土は微生物と植物の根が耕していた—  
文明の象徴である犁やトラクターを手放し、  
微生物とともに世界を耕す、  
アフリカ、アジア、南北アメリカの新しい農業。

**土・牛・微生物**  
—文明の衰退を食い止める土の話  
デイビッド・モントゴメリー [著] 片岡夏実 [訳]  
2,700 円 + 税 ISBN978-4-8067-1567-2



自然の恵みをていねいに引き出す  
南ドイツの多品種・有畜・小規模有機農家が語る、  
小さくても強い農業で  
理想のライフスタイルを手に入れる方法。

**自然を楽しんで稼ぐ小さな農業**  
—畑はミミズと豚が耕す  
マルクス・ボクナー [著] シドラ房子 [訳]  
1,800 円 + 税 ISBN978-4-8067-1550-4

3カ国民衆会議：危機の21世紀を超えて、つながりあい、食の幸せを未来に手渡すために

発行日：2018年11月20日発行

発行者：3カ国民衆会議実行委員会

連絡先：モザンビーク開発を考える市民の会

ウェブサイト：<http://mozambiquekaiatsu.blog.fc2.com/>